

計画・交通研究会

Association for Planning and Transportation Studies

会報 2009-1

発行日：平成21年2月6日

発行元：計画・交通研究会

目次

Opinion	1
空間情報のさらなる利用へ向けて	
News Letters	2-6
事業報告・活動報告	
Backyard	7
事務局通信	

□ Opinion

空間情報のさらなる利用へ向けて

布施孝志

空間情報に係る国内のここ10年を振り返ると、衛星測位の高精度化・リアルタイム化、商用高分解能衛星の打上げ、3次元レーザスキャナの応用拡大が、計測技術の主要なキーワードとして挙げられる。これらの計測技術やインターネットなどの通信技術を用いて、国による全国規模での空間情報の整備・公開が推進されてきた。このような環境下、測量法改正、公共測量作業規程改定、地理空間情報活用推進基本法成立などにより、法的にも新技術の利用やデータ整備・活用の一層の促進が謳われている。

空間情報技術の活況が醸成されつつあるように見える中、個別目的に応じて、多様な主体がデータを取得している。それらの中には、一部にしか知られていない、巷に埋もれているデータも多数存在する。これらのデータは、さらなる利用の余地を残していると考えられるが、著作権、個人情報保護、目的外利用などの要因により、未だ解決すべき多くの課題を抱えている。著作権に対しては、近年の流行であるWikipediaのように、著作権者以外の者に改変・複製を許諾するオープンな空間データ構築の仕組みとして、オープンストリートマップというサービスが存在する。これは、多数のユーザが自ら取得した道路データを特定のサーバに公開し、その集合によって道路地図の作成・修正を試みているものであり、その利用可能性は高いが、データの信頼性などに課題が残されている。

多様な主体によるデータを、誰もが利用できるように流通させるためには、信頼性のある情報を保有する各主体が、その情報を公開するイン

センティブを持つように促すことが重要であると考える。そのための有効な手段の一つとして、多様なデータを統合する技術・仕組みが挙げられる。例えば、各主体の地図を持ち寄り、複数の地図をまとめあげ、一定の精度においてひとつの地図として調製し、各主体に返す技術と仕組みの確立が効果的であると考えられる。その他にも、様々な調査における取得データの統合を前提として、各主体がその相互補完性を考慮した上で、効率的に調査を行うことなども想定される。それにより、単体のデータと比べて、データの相乗効果による情報の価値向上も期待できる。近年では、マッシュアップと呼ばれる、複数の異なる提供元の技術やコンテンツを複合させて新しいサービスを形作ることも着目されている。ここで培われた技術を発展させることも有用であろう。

今後は、これまで以上に、膨大な意味あるデータが流通することにより、大容量データを扱い、読み解くといったリテラシーも重要となる。空間情報技術を駆使し、大容量データを統合して付加価値を持つ情報を形成することにより、情報自体が社会基盤となることが促進される。その結果、社会基盤としての情報を扱うための学際的な社会基盤情報学の構築が、益々意味を持つようになることが予想される。筆者は、その任には不十分であるが、微力ながら少しでも取り組んでいきたいと思っており、皆様からのご指導を賜りたいとお願いする次第である。

(国土技術政策総合研究所 研究官)

■特別講演会・懇親会

●日時：平成20年12月19日（金）

特別講演会 17:30-18:30

懇親会 18:30-20:30

場所：プラザエフ 主婦会館

●特別講演会

講師：栢原英郎 様

(社)日本港湾協会会長、

(社)日本土木学会会長、計画・交通研究会理事

演題：日本人の国土観

講演要旨：

旧運輸省港湾局の数々の要職を歴任されたほか、経済企画庁、国土庁等で港湾に限らず広く国土計画づくりにかかわったご経験から、戦後の国土観の変遷につき総括され、今後必要となる国土のあり方についても根底となる視点を披露された。

1985年に経企庁の下河辺氏を中心に、気鋭のメンバーからなる国土戦略研究会に加わって、四全総にむけての作業にあたった。その過程で、日本人の国土観の中に、薩長土肥の国土観すなわち寒冷地を低く評価する傾向が、明治以来の教育によって刷り込まれたとみる。その一例として白秋、芭蕉の句を紹介された。しかし、第一港湾局長時代に新潟にいて、その地方の気候に接しデータでも確かめたところ、太平洋側よりも穏やかな気候であることを見出し、日本人の国土観に偏りがあると指摘された。

戦後の地域開発モデルの変遷に触れて、資源開発型から次第に企業誘致型に変わっていった。やがて企業誘致型のモデルは効率が低下し始める一方で、プラザ合意で円高が進み、企業は海外立地に向かった。そのような産業構造の変化過程にあつて、四全総ではあらたな国土形成の考え方が必要になった。到来する国際化、情報化、都市化を因数分解すると、共通の要素が『交流』であつて、国土を交流ネットワークの場ととらえた新しい地域活性化モデルを打ち

出した。交流の容易さを求めて都市化はさらに進んだ。

昨年策定された国土形成計画には、発展するアジアと結び付いた、多様で自立的な広域ブロックをつくっていく必要性が盛り込まれているが、まさにこの視点が重要であると強調された。

最後に、これからの国土観として、『交流する相手側に原点を置いた』国土観が必要で、港湾分野に身をおいた経験からも、『海から見た国土観』も考えていきたいと述べられた。



▲栢原英郎様の講演



▲森地会長の懇親会での挨拶

●懇親会

森地会長から、栢原様への御礼を述べられ、続いて当研究会の直近の活動として、次の3点につき簡潔に報告された。

- ・新理事(三井不動産㈱菟田常務執行役員)の選任
- ・一般社団法人化へむけての準備作業
- ・ホームページの有効利用のための情報発信活動

続いて、黒川前会長のご発声により懇親会が始まり、国土論議をはじめ各所で意見交換が行われた。

- ご紹介 栢原様は、当日の演題『日本人の国土観』と同題の本(出版 ウェイツ ¥1,890)を著されましたので、ご参加できなかった会員の方にお勧めいたします。

■2008年10月 計交研・当て塾共催セミナー
(第Ⅷ講・第9回)

●日時：平成20年10月22日(水) 17:00~20:00

●場所：計画・交通研究会会議室

●講師・演題

①「当て塾」塾長 鈴木忠義 先生

観光原論研究(6) 観光の概念(つづき)

②(株)ラック計画研究所 代表 熊谷圭介 氏

UJIターン・二地域居住・中長期滞在等のニーズ・
政策動向と、受入先進事例

●参加者：18名(うち計交研関係7名)

[講義概要]

◆観光原論研究・6◆(鈴木忠義)

1.4 観光の多様性と種類と特徴(補論)

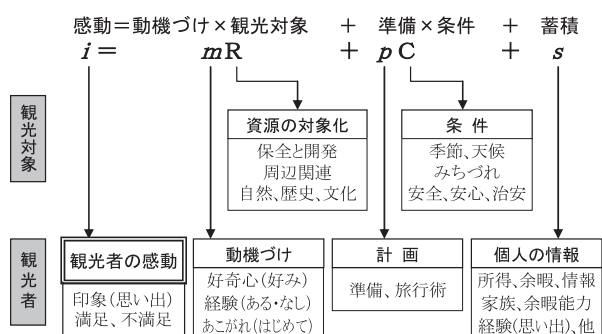
観光の多様性に関して、感動を形成する式を示したが、今回はその補論として、式を構成する各要素について解説した。

式の小文字(i, m, p, s)は観光者、大文字(R, C)は観光対象に関する要素である。

m(動機づけ)は好奇心、経験、あこがれなどによるもので、一人ひとり異なる。多くの経験がある人には発見する力があり、初めての所へ行っても十分な感動が得られる。

R(観光対象)は、資源(可能性のあるもの)ではなく対象化されたものである。この中の文化は現在の人間の生きざまであり、国や地方によって異なり、文明によって刻々と変化する。観光対象であり続けるためには、本物でなければならない。例えば、外国人を迎えるためには、本物のまちづくりが必要である。

s(個人の情報)ではストックの情報を持つことが重要で、教養の差となり、興味対象も異なってくる。子供たちには、早い時期に旅行の楽しさを教えることが大切だ。



1.6 産業としての観光(ツーリズム)

観光地には、一般的な居住条件とともに観光目的の施設が整備されている。宿泊施設にも、観光客向けとビジネス向けがある。観光の観点からみると、手段の目的化が行われてきている。例えば、鉄道の看板列車や豪華客船は、乗ることを目的としたものである。

観光の対象と活動は様々な分野に及んでおり、手段としての観光関連施設のほかに、様々な観光関連産業が成立している。

		手段の目的化
一般の人間居住条件	土地利用 交通・上下水道 医療・・・	看板列車 豪華客船 etc.
○観光 移動、宿泊、飲食 休憩・展望		
○観光対象と活動		
(0)一般・分類・概念 (1)自然系 (2)歴史系・保存 (3)文化系(会館・ホール) (4)スポーツ・レクリエーション		(5)公園・指定地域・墓園 (6)医療・保健 (7)企業開発レクリエーション (8)販売・流通 (9)風俗・ギャンブル・ゲーム

◆報告(フォーラム当て2008)・6◆(熊谷圭介)

都市住民の地方へのUJIターン、二地域居住、中長期滞在の促進は、異なる場で暮らす、または年代によって生活の場を変えるという多様な暮らし方を具体化したもので、豊かな自然環境や静寂な環境に触れ、心身の回復や家族・地域社会とのふれあいを促進し、これまでの生活のあり方や価値観の変革をもたらすことと期待される。

一方、地方では、過疎化や高齢化の進展により地域社会の活力が低下し、コミュニティの維持も難しくなっているなかで、都市住民の地方回帰が交流人口の拡大をもたらす、地域活性化に貢献することが期待される。

本報告では、二地域居住等のニーズ・政策動向と、これらの受入により地域活性効果を発現している事例について報告した。

[報告目次]

1. 地方への住替え・二地域居住のニーズ・
2. 国等における現状の住替え・二地域居住
3. 先進的取組

北海道伊達市/山形県鶴岡市/茨城県北部地域/
長野県松本市/広島県呉市/熊本県小国町

(文責：「当て塾」事務局 野倉 淳)

■2008年11月 計交研・当て塾共催セミナー
(第Ⅳ講・第10回)

●日時：平成20年11月12日(水)17:00～20:00

●場所：計画・交通研究会会議室

●講師・演題

①「当て塾」塾長 鈴木忠義 先生
観光原論研究(7) 観光の概念(つづき 1.3)

②宇都宮大学教授 永井 護 先生
日光市のまちづくりと足尾銅山

●参加者：12名(うち計交研関係6名)

[講義概要]

◆観光原論研究・7◆(鈴木忠義)

1.3 観光の3主体とそれぞれの5要素
(主体・目的・対象・手段・構成)

観光に参加する立場は3つあり、その立場に立って計画論的に考えることが重要である。

計画論的な思考とは、主体、目的、対象、手段、構成の5要素を明確にすることである。

観光の3主体と5要素

	第一主体	第二主体	第三主体
主体	観光者 (老若男女)	観光の受地 地の住民、出身者	職能としての参加 企業、専門家等
目的	非日常的な体験 期待として感動 他	職場 学習 — 遊び 生活・医療	観光事業 学習 — 遊び 生活・医療
対象	観光地(受地) 施設、サービス	ひと・もの・かね しくみ・ところ	ひと・もの・かね しくみ・ところ
手段	余暇、予算 移動、グループ 等	専業 兼業(副業)	専業 兼業(副業)
構成	観光プログラム	空間・経営システム	組織

(1) 主体(観光の3主体)

第一主体は観光者(一般の商業では消費者)、第二主体は地域、第三主体は職能による参加者。地域住民が観光業に携わるなど、第二主体と第三主体の一部は重複する。

近年の観光は第三主体に偏重している。3つの主体の存在を認識することが重要だ。

(2) 目的

第一主体は、自分のお金と時間を使って“非日常的な体験”により“感動”を求める。第二主体にとって観光は職場(雇用機会)となり、また、文明の軸(職場—生活・医療)と文化の軸(学習—遊び)に関わる効果が期待される。

第三主体の主な目的は観光事業であるが、このとき第一・第二主体のことをどこまで考えているかがポイントになる。近江商人の“三方よし”を再認識する。

(3) 対象

第一主体は、観光地、観光施設、観光サービスを対象とする。第二・第三主体の対象は、ひと・もの・かね・しくみ・ところである。

(4) 手段

第一主体は、自分の余暇と予算、移動手段、仲間等によって、目的地や行動を選択する。

第二主体の地域住民は、観光を主な職業とする場合と兼業の場合がある。第三主体では、観光客を主な顧客とする専業と、同じ事業の中で観光者以外も扱うという兼業がある。

(5) 構成

観光の地元地域では、空間・経営のシステムが重要である。ソフトなきハードはいけない。経営システムが不可欠。

第三主体は、組織が重要である。先を見通す経営者との確に行動する実践組織である。

◆報告(フォーラム当て2008)・7◆(永井 護)

足尾では産業遺産を活用したまちづくりの一環として、世界遺産登録をめざした取り組みが進められている。これまでの経過と今後の課題等を報告した。

世界遺産のテーマとして鉱害対策を取り上げることについての難しさ(歴史的、文化的価値に関する学術的な検証、関係主体の歴史認識の相違)が登録に向けての最大の課題である。一方で、この取り組みは、種々の指定を受けて、国の政策で動いてきたこれまでの観光地づくりの延長線上にあるとも言える。これを、大衆観光に対応して発展してきた日光を見直す一つのきっかけとし、観光地の再生を図るためには、世界遺産とまちづくりをいかに結びつけるかが課題となる。

[報告目次]

1.足尾のまちづくりの経過/2.提案書の内容と今後の取り組み/3.鉱山都市・足尾をどのように読むか/4.古河市兵衛と田中正造/5.日光市のまちづくりにおける足尾の役割

(文責：「当て塾」事務局 野倉 淳)

■2008年11月 計交研・当て塾共催セミナー (第Ⅷ講・第11回)

●日時：平成20年11月26日(水)17:00～20:00

●場所：計画・交通研究会会議室

●講師・演題

①「当て塾」塾長 鈴木忠義 先生

観光原論研究(8) 観光の概念(つづき)

②立教大学観光学部教授 安島博幸 先生

日本の高原リゾートのルーツ：アジアのヒルス
ステーション

●参加者：12名(うち計交研関係6名)

[講義概要]

◆観光原論研究・8◆(鈴木忠義)

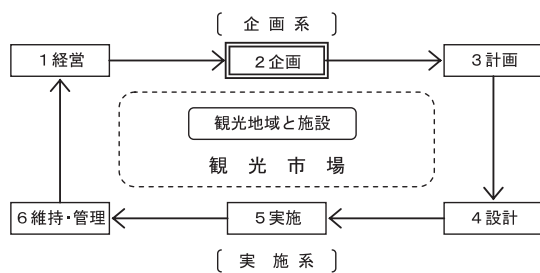
1.7 職能としての観光人とその養成

(1) 観光の職能の構成

観光の職能について、「1経営」から「6維持・管理」までの循環に沿って整理していく。

観光の学と術は他分野の応用であるから、「2企画」が重要である。企画において、観光とは何か、どんな観光を人が望んでいるのかを考えることで、他分野の手法を応用して計画や設計が可能になる。

実践には建設だけでなくオペレーションが含まれる。観光者への直接のサービスを担う仲居さんなど、人間的要素も含まれる。



(2) 種類と分類

観光関連の職業の種類と分類に関して、「観光の学と術の体系」として整理した分類をもとに再整理していく。

①観光政策

政治、法律・規則・条例・保険、行政・財政、外国観光事情、国際観光政策、国際交流、啓蒙、教育、研究・シンポジウム 等

②観光経済(マクロ)

観光経済、国際観光経済、観光消費経済、観光

産業連関、観光金融、サービス経済、雇用と所得、土地経済・開発経済、物産と観光 等

③観光経営(ミクロ)

観光地経営、ホテル経営、観光企業経営、旅行業、接客、料理・食材、興業、イベント、宣伝 等

(3) 資格検定

通訳・案内などの資格が職能の重要な要素で、権威あるものが必要である。

①法・制度による／②社団・財団など法人による／

③業界団体による／④自治体単独

(4) 教育

旅・旅行の意味や旅行術の教育が必要で、修学旅行はその実践となるべきである。

①学校／②講習会・セミナーなど

(5) 教材・参考文献など

◆報告(フォーラム当て2008)・8◆(安島博幸)

ヒルスステーションとは、アジアにおいて欧米の旧植民地の山地部に分布する避暑のための空間である。ヒルスステーションは、「欧米の植民地主義、植民政策の所産であり、宗主国が植民地の山地部に、標高差のもたらす気候的条件を利用して避暑のために建設した都市空間である」と定義することができるが、完全な植民地になったことはない中国や日本の高原避暑地も機能的にはヒルスステーションと同じ目的を持って建設されたと考えられる。これまでのヒルスステーション研究は、欧米においては、一つの研究領域を形成してきたが、中国や日本の高原避暑地は、ヒルスステーションに含めないことが通例で、ヒルスステーションとの関連については、研究が進んでいない。

ここでの仮説は、「中国や日本の高原避暑地は、欧米のヒルスステーションに影響を受けて成立した」ことを明らかにしようとするものである。

[報告目次]

1. ヒルスステーションとは／2. インド・シムラ／
3. インド・ダーズリン／4. ベトナム・ダラット／
5. マレーシア・キャメロンハイランド／
6. 中国・廬山／7. 考察

(文責：「当て塾」事務局 野倉 淳)

■2008年12月 計交研・当て塾共催セミナー
(第Ⅳ講・第12回)

●日時：平成20年12月10日(水)17:00～20:00

●場所：計画・交通研究会会議室

●講師・演題

「当て塾」塾長 鈴木忠義 先生
観光原論研究 (7) 観光の概念 (つづき)

●参加者：21名 (うち計交研関係9名)

[講義概要]

◆観光原論研究・9◆ (鈴木忠義)

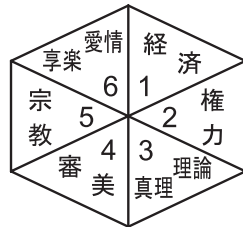
2. 結論 観光とは

観光の概念について、現在の私見を解説した。いろいろな軸を設けて説明しているが、要約すれば、“人生の最高の生きがい”の一つと考えている。最高の生きがいとは、自分の時間とお金を使って「感動」を求めるからである。その体験が多いほど人生は幸福である。

2.1 動機から目的に・・・観光の基本

古くからの旅の動機は6つに分類できる。その1は、マルコポーロの旅やシルクロードに代表される交易(経済)の旅である。2は、ローマの道などの統治・搾取(権力)の旅である。江戸時代の参勤交代、五街道なども統治の旅によるものである。3は、学問・技術の探求・思索・遊学(論理・真理)のための旅である。長崎街道は文明の窓口への旅を象徴していた。4は、芭蕉の旅(奥の細道)など探美・創作(審美)の旅である。5は、宗教や心のよりどころを求めた旅である。現代でも、聖地巡礼は盛んである。6は交流・遊楽(愛情・享楽)の旅で、旅から旅行となり、娯楽の要素が多くなる。

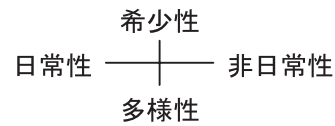
現代の観光旅行の多くは6の分類に含まれ、ディズニーランドやスポーツ観戦など幅広い。



2.2 観光者からみた体験評価

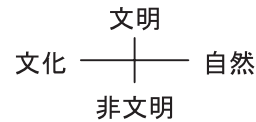
観光では、ただ一つ(1番)という希少性(独自性)が重要視される。また、一方で、様々なものを見て回るといった多様性もある。

この軸と、日常性・非日常性の軸による4象限によって、様々な観光体験を分類・評価することができる。



2.3 資源から対象へ

観光資源は可能性を持ったものであり、ある程度の開発が行われ観光者が接することが出来るものが観光対象である。それらは、文明・非文明の軸と文化・自然の軸による4象限で分類される。例えば、文明に漬かった人は非文明を求め、途上国の人々は文明を求める。



2.4 観光者の形態

一人かグループという同行者の軸と時間と空間の軸により、観光の形態が分類できる。

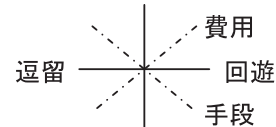
一人旅は別格で、一般の観光旅行とは趣が異なる。グループの旅行であっても、美術館の鑑賞などでは一人の時間を過ごす。

この2軸によって、どのような観光者に対応した観光地かを性格付けることもができる。



2.5 受け地の形態

観光者の行動として逗留と回遊があり、この軸に費用と手段の問題を掛け合わせることで、様々な受け入側が分類される。



2.6 職能の進化と発展

観光は途上国型と先進国型に分けて見ることができる。先進国型観光では、先進国の人々が楽しんでいる所へ外国人を迎え、外客と国民が同等である。途上国型観光は外貨獲得が中心である。現在の我が国は、先進国型と途上国型の両方の観光がある。

このような観光の進展、多様化によって、様々な職能が生まれてくる。

先進国型・・・外客・国民同等 単独
途上国型・・・外貨獲得 集団→都市 } 種類

(文責：「当て塾」事務局 野倉 淳)

■春の現地視察会のご案内

4月9日（木）午後、JR東日本、東急電鉄、東京メトロ各社のご協力を得て、大規模ターミナル改造と都市再生をテーマとして、新宿と渋谷の両地区での視察会を予定しております。具体的には後日メールにて会員の皆様にご案内いたします。

■総会と理事会の開催日程のお知らせ

4月22日（水）の夕方から、四谷駅前のプラザエフで予定しております。後日あらためてご案内申し上げます。

■当研究会のホームページによる情報発信活動について

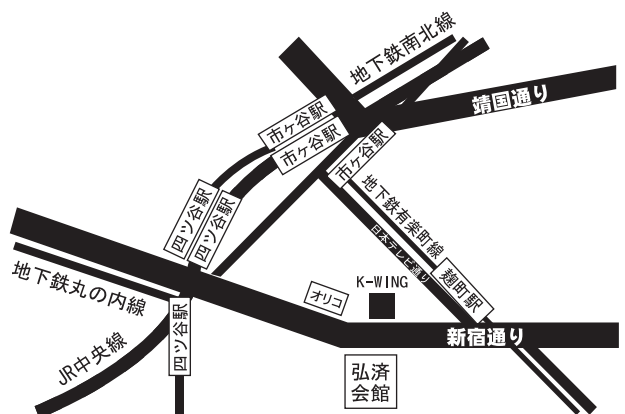
ホームページをさらに活用していただくため、『刊行物・文献資料』の欄に新たなメニューとして、以下のような資料を近々公開していく準備に入っています。

- ・都市モデルシリーズなど定例研究会の関係資料
- ・日本語でのワーキングペーパー
- ・当研究会と協働関係にあるアジア交通学会活動としての英語での論文ワーキングペーパー

計画・交通研究会

- 会長 森地 茂
- 副会長 石田 東生
- 副会長 家田 仁
- 副会長 屋井 鉄夫
- 事務局長 水野 高信
- 会報編集委員長 中井 祐

〒102-0083
 東京都千代田区麹町5-2-1 K-WING 6F
 TEL=03-3265-1774
 FAX=03-3221-5489
 E-Mail=
jimukyoku@keikaku-kotsu.org
 Homepage =
<http://www.keikaku-kotsu.org/>



計画・交通研究会案内図

交通

JR中央線四谷駅麹町口から徒歩6分/地下鉄丸の内線四谷駅徒歩6分/南北線四谷駅徒歩7分/有楽町線麹町駅4番出口より4分
 弘済会館前の大きなビル（オリコ）の右隣、1階にドラッグストア（クスリ）の入った小さなビル。